

1 NICTにおける情報セキュリティの研究

1 Researches on Information Security in NICT

松島裕一

MATSUSHIMA Yuichi

近年の我が国におけるインターネット利用者の急激な増加と、ADSLやFTTHに代表されるブロードバンド接続環境の急テンポな普及により、いまや誰もが、いつでもどこでも誰とでも情報交換ができるユビキタス通信の時代に突入しようとしている。このような状況になると、我々にとって情報通信サービスは日常生活におけるとても重要な社会インフラとなってきた。事実、電気、上下水道、ガスや交通機関などと同様に通常の社会生活を営む上で固定・携帯電話はもとより、インターネットによる各種情報の検索・交換、更には電子決済に見られるような金融の世界まで情報通信技術は我々の世界に深く入り込んできている。ウイルスに代表されるような、悪意のデータ操作はパソコンやデータベースを攻略して、それをまひさせる事態を発生させるが、最近では更に大規模なネットワークへの攻撃も見られるようになり、インフラとなる広域・広帯域な情報ネットワークもその脅威にさらされようとしている。

このような状況下において、情報通信インフラを安全なものとし、安心して利用できる環境にすることがここに来て世界的に見ても急務となっている。いわゆる情報セキュリティ技術の重要性が問われるようになったのである。独立行政法人情報通信研究機構(NICT)は、独立行政法人通信総合研究所(CRL)と特殊法人通信・放送機構(TAO)が統合して発足した組織であるが、以前よりそれぞれにおいて、独自の研究開発や、国レベルでの研究支援を実施してきた。旧CRLにおいては、平成13-15年度にいち早くこの情報セキュリティの重要性を認識し、特別プロジェクトとして「非常時通信グループ」を立ち上げて独自に研究開発を進めてきた。そこにおいて

は、インターネットの脆弱性に関する研究をはじめ、地震のような非常時における通信の確保や、インターネットによる被災地での被災者安否確認システムなどを開発してきた。さらに、平成16年1月には「情報セキュリティセンター」を組織して、この重要課題に取り組むための研究体制を整備してきた。一方、旧TAOにおいても、情報通信セキュリティの重要性にかんがみて、インターネットのセキュリティ対策技術や暗号など情報漏えい対策技術などに対して幅広い国レベルでの技術支援を継続して実施してきた。

上記の二組織が統合し、新たにNICTが発足したわけであるが、ここにおいては基礎研究から開発研究、更には実社会の基盤となる実用技術までを一貫して戦略化し実施する効率性の高い研究開発が求められている。情報セキュリティの研究開発分野はまさにこの戦略的な位置付けで進められるべきテーマであり、さらにオールジャパン体制の構築も世の中で希求されている分野でもある。一方、CRL/TAOの統合効果を生かすべく、新たに当機構内に部門横断の「ユニット制度」が設けられた。「情報セキュリティユニット」はその制度の有効性を十分に発揮できるユニットの一つとして発足し現在に至っている。

この特集号は、主にこれまで旧CRLが実施してきた研究の成果と旧TAOが支援してきた研究開発の報告をベースに、さらに最近のNICTとしての活動も含めて幅広い専門分野を網羅している。この特集号がこの分野の研究開発に従事する研究者や情報通信セキュリティに関心ある方々の今後の活動の一助になれば幸いである。



まつしま ゆういち
松島裕一

情報通信部門長・情報セキュリティユ
ニット長 工学博士
光ネットワークシステム